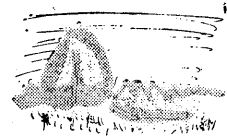


## 私の園の試み



浅羽睦子

子どもは、成長の過程の中で、目にふれるいろいろなものに働きかけながら、認識能力を育て、情緒を豊かにし、試す力や考える力を身につけていくようです。

この過程の中で保育者の役目は、子どもたちのそうした働きかけが発達段階に応じた無理のない形でなされ、その段階での可能性を充分に展開できるように仕向けることなのではないでしょうか。

そこで、「自然」についての指導法を考える上には、その時の子どもの中にあるレディネスを充分に把握すること、可能性を実現させるための適切な働きかけ方をつかむことが必要となってきました。

こうしたことから私たちの研究がはじめられたわけですが、「自然」の領域と一口にいても、その対象は無限とっていいほど広く何から手がけたらいいか見当がつかない状態でした。

一方、今までいわゆる「研究」というものについてふりかえってみますと、統計のための資料を集めることにのみ力をそそぎ、それが直接、保育の場につながってこない結果になったり、また、ある問題について考えだすと、それにだけ集中して、他の領域、ひいては子どもの生活全体がなおざりにされる傾向があったように感じます。

そこで、私たちは「研究」のために保育の流れがゆがめられることのないように、またそこから生まれた結果が、単に説明に終るのではなく、直接に保育に結びつくような具体的なものになるようにということに努力してみました。

その意味から、研究の対象としては、全体計画の流れの中にもられた身近な経験をいくつかとりあげ、そこにでてくる子どもの動きに保育者が考察を加えていくという形をとってみました。

結果として統計的処理や、分析ということが行なわれていません。

次に私たちが試みに概要を記し、御指導をいただきたいと思いません。

### ●研究の意図

- (1) 幼児の自然に対する興味、関心の向け方が年齢によってどのような特徴をもち、どのように発展していくかみる。
- (2) (1)の結果をほんとうに生かすには、どのように働きかければいいか考察する。

### ●研究の方法

行動観察の記録と考察

- a 自由あそびの状態で
- b 設定場面の中で

### ●観察の態度

- ・ありのままの姿をとらえる努力をする。
- ・幼児の言動を大切にす。
- ・教師の意図のおしつけをつとめてさける。
- ・見方、考え方、反応などできるだけ把握してその日のうちに記録をまとめる。

●対象とする経験は、「見る」「いたわる」「集める」「扱う」の各面からとりあげる。

(注) 幼児の自然に対する経験は、具体的・総合的なもので生活に

直結する場合が多く、決して内容をバラバラに切り離して考えられるものではない。しかしここで自然の指導について考える手がかりとして、これらの経験を前記の四つの面(文部省の自然指導書による)からこまかに眺め、その上になたって考察を加えてみた。したがって、このような分類は、たまたまとりあげた経験が、その一面だけで扱われるという意味ではなくて、ただ検討のために重点をおいたという意味である。

次に、私たちの研究集録の中から一部をとりあげて記します。

(保育の中で玩具をどの程度与えたらよいか——「扱う」という面を中心に——)

### ●主題をとりあげた理由

自然の指導書の中で「扱う」の望ましい経験の一つに「玩具であそぶ」がとりあげられている。しかし今まで玩具の与え方について「扱う」という面からあまり考えられていなかっただけに、その段階的な考え方が明かでない。そこで本園の幼児の実態の中からこの問題を考えていくために 実験的に玩具で自由

に遊べる場を設定してみた。

●記録の方法

・観点……○どんな玩具にどんな興味をもつか

- 1 年令的な特徴
- 2 性別による差はどうか
- 3 経験による差はあるか
- 4 積極性による差はどうか

・期間 六月～七月

・場所 保育室

・時間 一回約30分

・条件 玩具の中から好きなものを使ってあそぶ。使用法は事前に指導しない。

・対象 4 歳児80名 5 歳児90名

・使用玩具

- 1 動力玩具——オイル車、バトカー、ヘリコプター
- 2 ゼンマイ仕掛——消防車、ヘリコプター
- 3 電池仕掛——線路つき石炭車、ハシゴ付消防車

(今回は特に乗りもの玩具にかぎる)

●記録A

・対象 年少児45名

・グループ編成——生活グループごとに玩具を分けたが結果的に、

このグループは無視され実際には、電池仕掛の石炭車と他の玩具での遊びに二別されたので記録はこの二つを対象としている。

遊びの流れ		考察の手がかり
<p><b>A (電池の石炭車)</b></p> <p>▽皆の興味が石炭車に集るが勢力のある子どもに独占される。ほとんど全員の子どもがこの玩具にとびついてきたが皆で協力してあそぶことができず、ほとんどの子どもはだんだん他の玩具に移って3名の男子が独占する。</p>	<p><b>B (他の玩具)</b></p> <p>▽石炭車からはなれた子どもが他の玩具であそびだす</p> <p>▽子どもは石炭車から離れた子どもが他の玩具であそびだす</p> <p>▽子どもは石炭車から離れた子どもが他の玩具であそびだす</p>	<p>▽全体に好きな玩具でという指示だったので、初めは、形の複雑な珍しい石炭車に集ったようす。</p> <p>▽子どもは石炭車から離れた子どもが他の玩具であそびだす</p> <p>▽子どもは石炭車から離れた子どもが他の玩具であそびだす</p>

●記録B

・対象 年少児 28名

・グループ編成—— a

b 電池でない玩具

電池で走る石炭車

・条件 二回とも同じ子どもに同じ玩具を与えて、「これで時間が来るまであそびましょう」と指示する。

●記録 C

・対象 年長児 40名

・グループ編成—— a 組内で勢力のある子ども(男)

a' 〃 (女)

b 組内で勢力のない子ども(男)

b' 〃 (女)

●記録 D

・対象 一年保育児

・グループ編成 A 電池を使う玩具に経験がある

B 未経験

その他

以上の記録を綜括してみると、

玩具に対する興味のもち方、その扱い方には、かなりはつきりした年令的な段階があるようだ。

4 歳児では玩具を自分のからだの一部として使い、玩具といっしょになって走りまわっている姿がみられる。この段階では、自分のからだの一部として動かすことのできる玩具でないと遊びの道具として意味を持たないのだろう。

この年代の子どもにとっては、単に外観のちがいが興味の対象となるのであって、その構造やしくみの違いは、まったく意味のないものらしい。

こういったことから、4 歳児に構造のちがいやどうして走るのかといったしくみのちがいがいなどに関心を向けさせることは、発達的に少し無理なように感じる。したがって、みて気づく、みて楽しむといった高度な玩具を与えても、単に驚異的な興味や関心をひくこと以外には、あまり意味がないと思われる。この時期では、高度なものを与えるよりも、自分自身で扱えるもの、自分自身でかってに遊びを創造できるものなどを充分に与えることの方がよいのではないだろうか。

5 歳児になるとやや玩具を客観的にみて楽しむようすがみられる。そうした中で、「どうして動くのか」「こうしてみたらどうだろう」というような発見やくふう、疑問などがかなりみられ、それをお互いに発言し合うことによって友だち同志にも広がっていくようである。

この点からみると、しくみのちがった玩具を与えて比べさせたりかなり高度なしくみの玩具を与えることがある程度可能である。またそれが機械的な玩具に対する興味や関心を高めるということで、望ましいように思われる。

しかし、その後の発展からみると、ただ単にみて楽しむだけの高

度なくくみの玩具は、その玩具のもつ技能以上には遊びを發展させることがむずかしく、その場での好奇心を満足させることだけに終っているようにも感じられた。

それに対して、自分の手でも自由に操作できる玩具の場合は、その玩具を中心として、積木、机などを使って道路をつくったり、トンネルをくぐらせたり坂を競走させたりなど、いろいろ遊びを發展させながら気づいたり、たしかめ、くふうしている。

こうしたことから、幼児の疑問や興味、ためしてみようとする意欲を更へのぼすためには、じぶんで自由に操作のできる性質をそなえていることが重要な条件になると思われる。



(この他、四つの面よりとりあげた経験については、研究集録「自然とあそび」を参照)

私たちは、この研究をとおして、今までにもくり返し言われてきたことであるが、次のようなことを再び痛感しました。

○自然に対する興味、関心の向け方には、かなりはつきりした年齢的特徴がみられる。どんなあそびをとりあげる場合にも、発達に即したとり扱いを考へることが必要であろう。ともすると、より高い程度へとあせりがちであるが、その段階に即した経験を充分

に積み重ねることが、将来の科学的な芽をはぐくむ重要な土台となるのではないか。

○幼児の自然に対する興味や関心のたかまりは、小学校での理科のように単独の教科として学習されるものでなく、あくまでも総合的なあそびの中の経験として育てられ、他の領域によって更に広げられ、強められてくるようである。この意味からも、自然の指導は、他の領域とのからみ合わせの中で行なわれるべきであろう。

また、幼児の働きかけ方にかんがりの個人差がみられたのですが、この点、指導の場面でどう扱っていったらいいのかということが今後の大きな問題点となってきました。

この個人差は、どのようなことから生れてきたのか、ひとりひとりの動きからみると、必ずしも、知能との関係だけではなく、全ての生活に対するエネルギーのようなものによっているようにも感じられました。

幼児の自然に対する興味、関心を育てるには、もっと広い意味でその子ども自体の指導を考へなくてはならないようです。

こういった点から、今までの保育の中で私たち教師のとつていた役割をもう一度、みなおしてみたいと思っています。

(江戸川区立松江幼稚園)